論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　　わが国の戦後における「みち空間」思想の構築と展開に関する研究

氏　　名　　宮下　貴裕

近年わが国では道路空間の活用や「広場化」など、「人間のための道」に対する関心が高まっており、その整備の歴史に注目した考察も見られるようになっているが、それらの多くは道路行政に取り組んだテクノクラートによる法整備やそれらを受けて生み出された空間の系譜といった道路整備史的アプローチを採用している。しかし実際にはその一方で都市計画・建築分野の研究者、建築家、一般市民といった「民」の立場に位置づけられる様々な主体が都市における道の機能や価値に関する議論を蓄積させてきたと考えられるため、彼らが1958年－1984年という時代において、既往の考察では注目されてきた「公」の立場による道路整備史と並行して存在した、人間のための空間としての道に関する議論のコンテクストと、その文脈が持つ歴史的意義を見出すことを目的とした。本研究においては道という概念が道路のみならず、建ぺい空間・非建ぺい空間を問わない建築空間までを含んだ幅広い領域を対象としたイメージとして人々に認識されていたことを踏まえ、これらの領域において道として認識された空間を「みち空間」として位置付けることとした。

第1部では都市・建築分野の専門家が展開した「みち空間」に関する議論や空間デザインの展開を明らかにすることを目的として、まず2章で『建築文化』『SD』『都市住

宅』といった専門雑誌において発表された「みち空間」に関する言説の分析を行った。ここでは「道路空間に注目した議論の展開」「建築空間に注目した議論の展開」「道路と建築の関係性に注目した議論の展開」という3つのカテゴリーに各言説を分類し、各カテゴリーのコンテクストにおいてそれぞれの時代で関心の高まりが見られたテーマを「議論の系」として整理して、その系譜を明らかにした。分析で抽出された15の系においては、議論の対象とした空間領域が異なる中でも「みち」という概念に関して共通するイメージが描かれたり、ある系において見出された視点が他の系へと引き継がれたりと、それぞれの系の間に多くの影響関係が見られた。得られた知見が実際の空間デザインの発想に結びついたケースとあくまで調査・研究レベルに留まったケースという二つの方向性が存在し、これは分析の視点が手法論的アプローチによるものか、現象論的アプローチによるものかという違いが大きく関係していると考えられた。

3章と4章では2章から見出された二つの議論の方向性に注目し、3章では都市における建築の設計を通して手法論的アプローチから「みち空間」を生み出そうと試みた芦原義信・黒川紀章・槇文彦という3名の建築家に関して、雑誌や単行本などの活字媒体に発表された言説を対象として、各建築家のそれぞれの時代における問題意識や構築された「みち」に関する空間概念の変遷などを明らかにした。各建築家が「みち」のイメージを建築設計として空間化するまでの理論構築のプロセスに注目すると、同時期における都市に対する問題意識や既存の「みち空間」に対する認識など、現象論的アプローチから得られた知見を手法化して空間デザインに反映させようとする姿勢が存在した。よって、テクノクラートによって取り組まれた実際の都市計画と並行して展開された、「民」の立場からの「みち空間」デザインの系譜として位置づけることができると考えた。

続いて4章では現象論的アプローチから「みち空間」に関する様々な言説を発表し、多様な研究を通してわが国の「みち空間」が有する特性や価値を論じた専門家として上田篤に注目した。長年に渡る研究において上田とその研究室の中で共有されていた認識は、当時のわが国が空間や情報の密度が極めて高い「高密度社会」であるということであり、日本の「みち空間」は様々な要素が密集し一つの空間における場の転換が日常的に求められる状況の中で存在する空間であると1960年代から考察されてきた。このような基本認識に基づいた議論は、研究のテーマが変化する中でも、わが国の「みち空間」の特徴や固有性を明らかにする探究の軌跡であったと言える。

第2部では一つの特定の「みち空間」に注目し、専門家のみならず実際に生活を展開する市民までを含む様々な主体が、「みち」に関する議論を通して都市空間の形成にどのように介入していたのかを明らかにすることを目的とした。ここでは東京・銀座通りにおいて「民」の立場から展開された「みち空間」に関する議論や設計活動、空間デザインに向けた運動の展開を把握することとした。まず5章では、銀座通り沿道に建築を生み出した建築家の当時の銀座通りに対する認識やそれぞれの建築の設計におけるデ

ザインのアプローチに注目し、建築を設計するにあたって建築と道路空間の関係性をどのように構築しようと試みていたのかを明らかにした。また、都市・建築分野の専門家が銀座通りの「みち空間」に言及している議論に注目すると、1960年代におけるモータリゼーションが銀座通りの道路空間や商店街に与えた影響を問題視する議論、1970年から実施されるようになった歩行者天国に対して関心が向けられた議論、そして1970年代後半から見られる沿道建築を含む銀座通りの都市空間や景観のあり方に関する議論という3つの潮流が存在し多くの問題提起がなされていたことが明らかになった。

6章では、銀座通りの道路空間や沿道建築に対して高い関心を示してきた商店街組織・銀座通連合会に注目し、運動を展開していく中で組織内部で共有された銀座通りの都市空間に対する現状認識や目指すべき「みち空間」のイメージの展開を組織の内部資料から明らかにした。その中では1950年代から1980年代に至るまで、自らが思い描く「みち空間」イメージを実現させるために、道路空間の整備に関する建設省国道工事事務所と協議が繰り返し行われており、銀座通りの「みち空間」に対する意識や空間イメージとして、道路空間と建築の壁面によって構成される領域の視覚的「美」という観点から、ショーウィンドウが連続的に配置される空間構成や連続する壁面線に見られる「見通しの良い道」というイメージが継承されていたことが明らかになった。

第1部において「みち空間」という物理的空間あるいは「みち」という概念について論じ、またその創出に取り組んだ動きの展開を重層的に明らかにする中では、共通する認識として、「みち」という概念には人々が共有しうる特定のイメージが内包され、その表現を用いることで都市における空間デザインやアクティビティの創出に際する共通言語として機能すると考えられていたことが理解できる。これらのことから、わが国の法体系の中で人間のための空間としての「みち」の位置づけが不明瞭となった時代においても、わが国の都市形成プロセスに対する理解を基盤として、都市を捉え、都市を語り、都市を生み出すためのイメージとして「みち」は失われることなく存在し、本研究における時代区分の始点として設定した1958年という年代の以前から連続的に継承されてきたイメージとして認識されていたことが明らかになった。

また第2部において注目した銀座通りでは、地元商店主という主体が道路空間整備に関してテクノクラートと度重なる協議を行いながら自らの思い描く空間イメージを実現しようと試み、また沿道で開発を行う建築家に対しては、施主という立場も有することが多かったことから、銀座通りという「みち空間」のイメージを発信しながら、道路空間と建築空間のデザインに間接的に関わる立場にあったことが明らかになった。彼らが各主体の媒体となって、間接的に銀座通りの空間デザインに関わることで、ショーウィンドウを重視する視点や見通しの良い空間を求める視点など、各主体で共通した「みち空間」イメージが構築されることにつながったと考えられる。そして西欧と日本という二項対立から離れたスタンスとして、地元商店主らが戦前から戦後にかけて銀座通り

の空間デザインに向けた運動を展開し、長きにわたって自らの街を眺めてきた中で有してきた空間把握アプローチを継承させるという系譜が見られた。

本研究が注目した時代において見出された「みち空間」イメージを整理すると、一つは西欧諸国をはじめとした海外の都市に見られる空間形態や空間デザイン手法に理想形としての価値を見出し、それらをわが国の都市空間にも反映可能な普遍的なイメージとして「西欧的啓蒙主義型」、わが国の都市の形成プロセスに注目し、歴史的に「みち空間」が「人間のための空間」として機能してきたことに価値を見出すという「日本的特殊性肯定型」、さらに特定の「みち空間」に注目することで、人々によって共有されている場所固有の空間イメージに価値を見出す「地域文脈主義型」と言えるものが存在することが明らかになった。一般市民の間での議論においては、特定の地域の空間的特性の中で共有されてきた生活体験や問題意識が「みち空間」思想の基盤となったと考えられる。

このような多様なイメージは、わが国に存在しないものを求める議論の蓄積と言える「広場論」のようなものとは異なり、「みち」というわが国に歴史的に存在してきた概念に関する議論に注目することによって把握することができたものであり、現代の公共空間に関する議論においても、このような「民」の立場によって現在に至る「人間のための空間」としての「みち空間」を求める思想のコンテクストが確かに形成されていたことを再認識し、再び「我々にとって『みち』とは何か」という問いを繰り返し求めていく必要があると考える。